

三月十一日朝、命が消えた海に祈りをささげる人影。あの日的小学生が成人になる歳月が過ぎて「全国で約三万一千人が避難生活を送る」(十一日夕刊) 現実は重い。

「なぜこの国を運営する人たちはこれほどまでに原発に固執するのだろうか」(十七日朝刊)と問う音楽家の坂本龍一さん。「原発事故 終わっていない」(十二日朝刊)と南相馬からの叫び。しかし「原発60年超運転 法案提出」(一日朝刊)は平然と行われた。復興の道のりは遠く、原発の復活は早い。

「袴田さん再審認める」(十四日朝刊)に続く「検察 特別抗告を断念」(二十一日朝刊)で無罪が実現しつつある。本紙も連載「開いた扉」などで事件の再検証を続けてきたが、五十七年の歳月はあまりに長い。問題は再審法で「強まる法改正の声」(十四日朝刊)をさらに高めるべきだろう。

「首相キーウ電撃訪問」(二十二日朝刊)の理由がG7議長国のため「首相 負い目払拭に懸命」(二十三日朝刊)とは情けない。支持率の復活を狙う首相だが、焦りや負い目が先行する外交では効果も半減。そのウクライナの和平はまだ見えないが

「アウシュビッツからの反戦声明」(二十九日朝刊)は示唆に富む。昨年、ロシアの侵攻時に国営ポランド通信を通じて発表された声明で「ウクライナの市民とこの戦争に反対する勇気あるロシア人との連帯を表明」(同)した。

アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所は人類の負の遺産であり同時にEU各国の人権教育の場でもある。以前、筆者が訪問した折にはドイツからの修学旅行生と一緒に見学した。日本でもこの一月まで豊田市美術館がゲルハルト・リヒターの連作「ビルケナウ」の展覧会を開催。収容所で死体を焼く写真に触発され巨大な抽象画に平和への希求が込められた。現地ガイドの中谷剛さんは「皆が社会に関わり合う。それが戦争させない、起きても止められる唯一の方法なのだろう」(同)と説く。折しも統一地方選のさなか、一票の行使は「社会との関わり」の原点でもある。まず投票へ行こう。

(静岡文化芸術大名誉教授)